

B-15 ドライクリーニングに関する研究 - 汚染布の検討 -

鹿児島県立短大 中村道子

目的 ドライクリーニング用のモデル汚染布の作成を最終の目標として、まず3種の人工汚染布を作成し、活性剤濃度が洗淨性、再汚染性にどのように影響するかを調べた。同時にこの3種の汚染布について湿式洗淨を行い洗淨性を比較した。

方法 汚染布、再汚染布ともにアクリル平織地を用いた。汚染布は日本油化学協会法による汚染布(SP)、花王ラノリン汚染布(SL)、油なしカーボン汚染布(SB)の3種とした。洗淨条件は乾式は溶剤としてパークレンを用いA-OTの濃度を0, 0.5, 1.0, 2.0, 3.0, $g/100ml$ とした。湿式はSDSを0, 0.01, 0.05, 0.1, 0.2, 0.4 $g/100ml$ とした。

結果 乾式洗淨 活性剤濃度については、0.5 $g/100ml$ で洗淨効率が最も高く、再汚染率は最も低かった。再汚染率が小さく洗淨効率の高い順に0.5g, 1g, 2g, 3g $/100ml$ の順となった。この傾向は3種の汚染布ともほぼ同じ結果となった。又この3種の汚染布を比較した場合洗淨効率の高い順にSL > SP > SBの順となった。

湿式洗淨 汚染布の洗淨効率の高い順にSL > SP > SBの順となり乾式洗淨と同じ傾向を示したが濃度ならびにビルダー配合についてはSL汚染布とSP汚染布とは異った傾向を示した。